



## 検査値を読むトレーニング ルーチン検査でここまでわかる 本田孝行 著

●B5 頁352 2019年1月  
定価：本体4,500円＋税  
[ISBN978-4-260-02476-1]医学書院刊

著者はここ10数年来、RCPC(Reversed Clinico-pathological Conference)を積極的に紹介、発信し、世に知らしめた立役者である。RCPCとは「検査データを示し、そこから病態を読み解く」という臨床検査医学の教育手法の一つで、個々の検査を深く実践的に学習できるという特徴がある。データの表示法や、conferenceの進め方は多様であるが、重要な原則がある。「1. 疾患名を当てることが目的ではない」。ゲーム感覚として診断するのは副次的楽しみとしてあっていいが、時々、推測した病名が外れると不機嫌になったり、こうも考えられる、など執拗に食い下がったりする参加者がいる。そもそも検査値だけから病名診断はできない。病態を読み解くことが主たる目的である。著者の信念もそのように一貫している。「2. 基本データのみ提示する」。検査というものは、2次的・特殊なものになればなるほど疾患に直結し、結果の解釈は容易となる。基本的・一般的なもののほど考えをめぐらすことが多く、この基本検査(ルーチン検査)に強くなることが臨床的にはどの職種、どの場面でも求められる。著者はかなり以前より「基本検査成績は最早、問診や基本的診察と同等に利用すべき」と主張しており、この基本検査へのこだわりが真骨頂である。

さて、conferenceの進め方には大きく2通りある。オーソドックスな方法は、基本検査データを提示し(ワンポイントでも時系列でもよい)、個々の検査につき、正常でも異常でも型どおりに解釈し、総合して病態を

推測し、必要な2次検査を挙げ、その結果を提示し、最終病態診断に至るというものである。評者はこの方式を実践している。もう一つは著者が実践している「信州大学方式」で、基本検査データの時系列を示し、「栄養状態」「細菌感染」など代表的病態それぞれにつき、対応する検査データを基に評価するもので、病態指向型であり、ダイナミックに病態の変化を検討するという、ある種、臨床的・実地的なものである。本書には、それら代表的な病態が網羅されており、病態に関連した検査値の理解を深めるのに大変役立つものと思われる。

なお、本書には随時、「個々の検査の読み」も解説されており、教科書としても役立つ。疾患解説に至ると、検査値だけでそこまで言えるか、という印象を持たれる向きもあるかもしれないが、上述したとおり疾患を診断するのではなく、「この病態では検査値はこう動く」という学習態度であるべきである。ただ一つ、評者の立場からの意見として、本書で取り上げる症例は「急性、重症、救急」などのイメージのものが多く、急を要さないが診断に難渋している症例などはオーソドックスな手法が適していると思う。

繰り返すが、本書は「基本検査とその動き」に徹底的にこだわり、得られる学習効果は大である。臨床検査関係者はもとより、全ての医療関係者、医学医療に興味を持たれる一般の方々に薦めたい。